

第3回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会専門部会 (経済、スポーツ・文化分野) 会議録

日時：令和4年7月1日（金）18時開会

場所：札幌市本庁舎 12階1号・2号・3号会議室（札幌市中央区北1条西2丁目）

出席：川島委員、木村委員、佐藤大輔委員、柴田委員、中田委員、原田委員*、平本部長、山本一枝委員*、山本強委員（*…オンライン出席）

事務局：浅村政策企画部長、中本企画課長、田中企画係長、熊谷企画担当係長、平岡企画担当係長

1. 開 会

○事務局（浅村政策企画部長） 開始時間より少し早いのですが、委員の皆様がおそろいですので、ただいまから札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会の専門部会を開会いたします。

私は、事務局を務めております札幌市の政策企画部長の浅村でございます。引き続き、よろしくお願いいたします。

委員の皆様におかれましては、お忙しい中をご出席していただき、ありがとうございます。

前回の専門部会におきましては、分野横断的な施策についてご意見を頂戴したところでございます。これについては、ほかの部会でのご議論も含めまして、現在、取りまとめをしているところでありまして、9月に予定しております審議会でご確認をいただく予定でございます。

今回は、基本目標で掲げている8分野のうち、経済分野及びスポーツ・文化分野の2分野の施策についてご議論をいただきたいと考えております。

なお、参考資料として、ほかの部会で扱っている分野の施策もお配りしておりますので、必要に応じてご参照をいただければと思います。

また、本日は、市役所内の関係部局の職員もオブザーバーとして傍聴させていただいておりますので、ご了解をいただければと思います。

それでは、分野ごとの施策と前回ご議論をいただいた横断的な施策とで戦略編を主に構成することになりますが、こうしたことによりまして、戦略ビジョン全体を立体的な戦略にしていきたいと考えておりますので、今日もよろしくお願いいたします。

○事務局（中本企画課長） 同じく事務局を務めます中本です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の専門部会は、オンラインも含めて9名の委員全員にご参加をいただいております。遅い時間、また、お忙しいところをありがとうございます。

オンラインで参加されている原田委員と山本一枝委員におかれましては、いつもどおり、

ご発言の際には挙手をしていただき、ミュートを解除の上、ご発言をいただくようお願いいたします。

それでは、この後の議事進行については、平本部長にお願ひしたいと存じます。よろしくお願ひいたします。

2. 議 事

○平本部長 週末の夕刻にお集まりくださいます、どうもありがとうございます。

今日もご審議のほどをよろしくお願ひいたします。

経済分野及びスポーツ・文化分野を扱うのがこの専門部会のタスクです。

まず、戦略編におきます分野ごとの施策の位置づけなどにつきまして、もう既に委員の皆様方にご承知かとは思いますが、改めてご説明をいただければと思いますので、お願ひいたします。

○事務局（中本企画課長） それでは、資料1について、振り返りも含めてご説明をさせていただきます。

最初に、資料1-1の戦略編の策定に向けてという資料でございます。

こちらには戦略編のイメージを掲載してございます。前回の専門部会でもご説明させていただいたとおり、大きく3章構成にしたいと考えてございます。このうち、第1章に当たる分野横断的に取り組む施策については、前回の専門部会でご審議をいただいたところでございます。先ほどもございましたが、9月頃に開催する審議会にて、この部分を改めてご議論していただきたいと考えております。

本日は、戦略編の第2章に当たるまちづくりの基本目標ごとの施策のうち、赤枠で囲みました経済とスポーツ・文化の二つの分野について、青枠の囲みにあるように、基本目標の達成に向けて取り組むべき施策について、また、施策を推進するに当たっての効果的な手法について、主にご意見を頂戴できれば幸いに存じます。

また、資料の一番下にイメージ図を載せてございます。こちらは、計画体系を掲載したものとなります。本日ご議論をいただく戦略編は、このピラミッド図の赤色の部分に相当します。

そして、右側の表では、それぞれ一番下のところに例を掲げました。ビジョン編では、安心して子どもを生み育てられるまちという到達したい目標を設定したとして、戦略編では、それに基づく行政の施策として、例えば、ワーク・ライフ・バランスの推進に向けて、企業等の働きやすい職場環境づくりを支援しますということに掲載します。この後、中期実施計画ということで、具体的な事業を別の計画で定めてまいるのですが、その際には、さらに具体化されて、企業に対し、育児休業取得者が生じた際の助成を行いますという個別の事業を掲載します。あまり厳密に捉えるとご発言が難しくなろうと思いますが、一応、こういう整理があるということをお頭の片隅に置いておいていただくと幸いに存じます。

それから、資料1-2は、前回もお配りをしており、既にご答申をいただいているビジ

ョン編の振り返りですので、必要に応じて参照していただければと思います。

また、資料1－3として、少しボリュームの多い資料を添付してございますが、こちらはビジョン編の基本目標の部分の抜粋したものですので、こちらでも本日の議論の中でビジョン編の振り返りが必要になったときにご参照をいただければと思います。

こちらをおめくりいただいて、2ページをご覧いただきたいのですが、私たちが取り組むことを市民・企業と行政に分けた表で整理しております。戦略編は、この表のうち、右側の行政が取り組むことを具体的に掲載していくイメージですので、よろしく願いいたします。

資料1についてのご説明は以上でございます。

○平本部長 ただいまご説明をいただきました内容について、ご質問があればお出しただければと思いますが、いかがでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○平本部長 それでは、特にご質問はありませんので、これからは、まず、前半の経済分野を議題とさせていただきます。

事務局から資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（中本企画課長） 経済分野の戦略編の施策については資料2になります。

この中身のご説明に入る前に、これまでの10年間とこれからご議論をいただくこの先の10年間がどのように違うのかについて、少し大きくりますが、振り返りをさせていただきたいと思います。

こちらは、本日、資料をお付けしておりませんが、ビジョン編の第2章のところでご議論をいただいた内容と認識してございます。

経済分野の過去10年について、大ざっぱに申し上げますと、札幌だけではなく、日本全国の話になりますが、インバウンドの急増に象徴されるように、今に比べるとまだ伸びる分野が少し見えていた時代であったのかな、と認識しております。このため、現行の戦略ビジョンでは強みを生かす施策展開を重視しており、実際に施策を展開した結果、外国人宿泊者数が右肩上がりであったり、観光以外の分野であっても、食料品の輸出額が増えたり、市内企業の業績を売上高で見ると増加しているなど、一定の成果が上がってきたと認識してございます。

一方で、我々は、コロナ禍を経験いたしました。また、札幌も人口減少局面に突入したということもあり、担い手不足や市場規模の縮小がより現実味を帯びてきたというのが現状かなと考えております。

また、最近では、原材料価格の高騰の問題もあろうと思います。このため、生産性をさらに上げていかなければならない、あるいは、付加価値をつけていかなければならない、また、道外流出が著しい理系の大学卒者や院卒者の活躍の場の用意など、幾つもの課題が見えてきて、そんな時代に今立っているという認識です。

このため、次の10年はどのように転換していくかということで、チャレンジ、挑戦を重視する施策展開が必要であろうということで、基本目標の中にチャレンジという言葉が埋め込まれたと受け止めております。

一方で、経済分野ですので、急に変われるわけではないですが、時間をかけてでもそういう要素を少しずつ取り入れていくということなのだろうという解釈です。

この挑戦の中には、DX—デジタルトランスフォーメーションや、スタートアップ、オープンイノベーション、また、IT、クリエイティブみたいなものを横串とし、ほかの産業にも好影響を与えていくような、あるいは、スノーリゾートやSDGs、ゼロカーボンというものも文脈として入ってくると思いますが、そのような概念を含むものという認識を持って資料2を整理してございます。

それでは、資料の中身に入ってまいります。

こちらの資料の見方ですが、基本目標とそれに基づく目指す姿はビジョン編と連動しており、目指す姿ごとに取り組む施策を丸の箇条書で列挙したというつくりになっております。中でも、特に充実強化することを上の赤枠のところに出したという資料構成になっております。

これまでの分野のご説明では、主に充実強化することに関わる施策に触れさせていただいていたのですが、経済分野はほぼ全てがそれに該当するものですから、端折りながらになります。全体をご説明させていただければと思います。

まず、基本目標10の「強みを生かした産業が北海道の経済をけん引しているまち」の目指す姿1の「札幌市・北海道の強みである食や観光分野の産業が、時代の潮流を的確に捉え、国内外からの新たな消費を生み出し、札幌市はもとより、北海道の経済成長をけん引しています。」に向けた施策についてです。

一つ目の丸から三つ目の丸までになりますが、強みである食産業の振興という観点から、国内外への販路拡大に向けて、商談機会の創出や海外進出の支援を行うほか、食のまちとしてのブランド力向上に向けた魅力の掘り起こしや人材育成の支援、競争力の強化に向けて商品開発や認証取得のための支援を行うことを掲げてございます。

また、四つ目から六つ目までの丸になりますが、同じく強みである観光産業の振興という観点から、観光の魅力のさらなる向上のため、観光コンテンツの充実に取り組むほか、観光客を呼び込むための誘致プロモーションなどの誘客促進と受入れ環境の整備、ポストコロナにおけるMICEの市場動向を踏まえ、来札者の増加に向けた取組を行っていくことを掲げております。

次に、目指す姿2の「ITやクリエイティブ、健康福祉・医療分野の産業が、国内外から投資や人・企業を呼び込み、札幌市の新たな強みとして更なる成長を遂げています。」に向けた施策についてです。

札幌市の新たな強みとなり得るITやクリエイティブ、それから、健康福祉・医療分野の産業の振興という観点で三つの施策を掲げております。

一つ目は、IT人材の確保育成やIT市場拡大を支援するほか、市内企業の先端技術の活用を促進すること、二つ目は、企業のデザイン経営の導入を支援するとともに、コンテンツ分野の開発支援や人材確保に取り組むこと、三つ目は、企業等の研究環境の整備やネットワークの構築を支援し、産業集積を促進することを掲げてございます。

続きまして、資料の右上になりますが、基本目標11の「多様な主体と高い生産性、チャレンジできる文化が経済成長を支えるまち」の目指す姿1の「中小企業・小規模企業や商店街など、事業を営むもの全ての活動が活発で、地域のにぎわいや経済を支えています。」に向けた施策についてです。

一つ目の丸では、札幌の地域経済を支える中小企業の経営基盤を強化するため、資金繰りや事業継承などの経営課題の解決、新製品の開発に関する支援を行うことを掲げています。なお、明文化はしておりませんが、SDGsやグリーン社会の実現に向けた取組を行う企業への支援もここに盛り込んでいるという考えでございます。

丸の二つ目では、商店街活動の活性化に向けて、にぎわいの創出や集客促進等の支援を行うことを掲げております。

次に、目指す姿2の「様々な分野でデータや先端技術が活用され、生産性が向上することにより、人口減少社会においても持続的な経済成長を遂げています。」に向けた施策についてです。

丸の一つ目では、生産年齢人口が減少する中、様々な分野における生産性の向上に向けて、データや先端技術の活用促進に関する支援を行うことを掲げています。

その他は記載のとおりです。

次に、目指す姿3の「行政、大学、民間組織などの関係機関が一体となり、起業家を育成・支援する体制や環境が充実し、誰もがチャレンジできる文化が根付くことにより、多くのスタートアップが生まれ続けています。」に向けた施策についてです。

スタートアップ・エコシステムの成熟に向けて、企業、大学等と連携し、スタートアップの創出、集積を促進するとともに、支援する企業や人材を呼び込み、スタートアップの成長フェーズに適した支援を行うことを掲げてございます。

次に、目指す姿4の「様々な企業の立地や操業が進むことにより、産学官連携や、国内はもとより海外の企業などとの交流が活発に行われ、ビジネスチャンスや新たな価値が創出され続けています。」に向けた施策についてです。

丸の一つ目では、魅力のある雇用の場を創出するため、札幌の強みや優位性を生かした企業誘致を促進するとともに、創業に関する支援を充実すること、丸の二つ目では、新たな産業やビジネスの創出に向けて、産学官等によるオープンイノベーションを促進し、産業交流ができる環境を充実させること、丸の三つ目では、海外からの積極的な需要獲得に向け、企業の海外展開や国際ビジネス人材の育成を支援することを掲げております。

資料をおめくりいただきまして、2枚目に入ります。

基本目標12の「雇用が安定的に確保され、多様な働き方ができるまち」の目指す姿1

の「安心して働ける魅力的な雇用が安定的に確保されるとともに、企業も必要とする人材を確保できています。」に向けた施策についてです。

丸の一つ目として、就業率の向上に向け、求職者の地元就職への支援を行うこと、丸の二つ目として、企業の人材確保に向けて、人材採用や育成、定着率の向上に関する支援、また、道外、国外から札幌経済を担う人材を呼び込むため、U・I・Jターンの促進や高度人材の誘致を支援することを掲げております。

次に、目指す姿2の「多様な人材が持てる能力を発揮し、誰もがやりがいや充実感を得ながら働くことができているとともに、高い専門性を生かすことができる職場で、若い世代を始めとした幅広い年代の人材が活躍しています。また、こうした多様性が、イノベーションをもたらすきっかけとなっています。」に向けた施策についてです。

丸の一つ目として、若い世代の地元定着に向けて、専門性を生かすことのできる地元企業等への就職を支援すること、丸の二つ目として、女性や高齢者などの有業率が低いという札幌の課題を踏まえ、働く意欲のある多様な人材の就業を支援することを掲げています。

最後に、目指す姿3の「働きやすい職場環境が整備されるとともに、多様で柔軟な働き方や、仕事と生活の調和のとれた生き方が実現しています。」に向けた施策についてです。

企業における働きやすい就業環境の整備に向け、時間や場所を選択できる柔軟な働き方の導入や働き方改革に関する支援を掲げてございます。

経済分野については以上でございます。

○平本部会長 ただいま、資料2の経済分野につきまして、これまでの10年とこれからの10年の位置づけも含めてご説明をいただきました。ここから先は委員の皆様方にご自由にご発言をいただきたいと思っております。ご意見やご質問、どんなことでも結構ですので、挙手の上、ご発言をいただければと思っております。

オンラインでご参加の山本一枝委員が手を挙げていらっしゃいますので、お願いいたします。

○山本（一）委員 とてもよくまとまってきたなという印象です。まず、皆様のご努力にとっても感謝しております。

では、私からは二つあるのですが、まず、資料2の基本目標10の中の目指す姿2にぜひ教育という文言を加えていただきたいと思っております。

具体的にご提案させていただきたいのですが、このご提案は、まちづくりの重要概念のスマート（快適・先端）の誰もが先端技術などにより快適に暮らし、新たな価値の創出に挑戦できる社会の実現につながるというところに関係するものです。

実際には、基本目標12に当たります「雇用が安定的に確保され、多様な働き方ができるまち」を考慮したものです。具体的には、若者の雇用の促進と未来の経済を担う子どもの学習支援についての施策案です。

現状では、親の経済力の違いによる教育格差が広がっていますが、札幌市の子育て支援都市としての立ち位置を高め、未来の経済を担う子どもの教育の機会の公平性と、若者や

子育て中の方、障がいのある方の雇用につながる施策案をご提案させていただきます。

まず、学童保育を利用している児童にITを用いて放課後の学習支援をするという内容です。例えば、学童保育施設にITを用いた学習支援のインフラを構築します。ネット環境や機材ですね。もう一つは、学習支援員というものを新しく設けて、ITを用いてリモートで子どもそれぞれに合わせて分からないところが分かるようになるまでしっかりと教え、学習の悩みなどの相談に乗るということです。この新しい人の名前の学習支援員というのは、子育て中の方や障がいのある方などの多様な働き方につながります。札幌市が学習支援員を必要数雇用するということが実現しましたら、若者の新たな雇用につながると思います。若者だけではなく、様々な障がいによってなかなか働けない方でもとてもいい働き口になると思っております。

もう一つは、資料2の基本目標11の目指す姿1のところですが、これは非常にさらっとして、気になっておりました。「中小企業の経営基盤を強化するため、資金繰りや経営課題の解決、新製品や新技術の開発を支援します。」となっていますが、項目を分けていただいて、「中小企業の経営基盤を強化するため、資金繰りや経営課題の解決を支援します。」で一回区切りまして、新しい項目としまして、「加速する時代の変化に合わせ、新製品や新技術の開発を希望する企業に対し、産学官連携の活用の方法を伝え、マーケティング、展示会への出展、新しい販売方法など、必要な場面に合わせて切れ目なく支援します。」というような記載をお願いしたいと思います。

○平本部会長 2点ございまして、目標10の目指す姿2のところは教育に関わる文言を追加できないかというご提案、それから、目標11の目指す姿1については、文章を2分割すると同時に、後半に、加速する時代の変化に合わせというより今日的な文脈で強調されてはどうかというご発言かと思っております。

まず、2点目につきましては私も賛成です。

また、1点目については、山本一枝委員のご趣旨はよく分かりますと同時に、これは子ども・若者の子育て分野の戦略課題とも関わる場所だと思うのです。分野横断的な話について、前回のこの専門部会でご議論をいただいたのですけれども、それとの関わりで、こういったところをどう扱うかについては、戦略編の書きぶりに関わる問題でもありますので、事務局にご検討いただくということでもよろしいでしょうか。

○山本（一）委員 お願いします。

○平本部会長 2点目については、多分、できることだと思いますし、むしろ、そういうふうを書くほうがこれからの10年間を目指すということを強調する意味でもよりよいご提案だと思いますので、ぜひご検討をいただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○山本（強）委員 僕は、基本目標10に非常に重要なことが書かれていると思うのです。それは、北海道の経済をけん引しているという表現ですね。これは私が札幌市に期待する非常に大きなことなのですが、北海道の経済をけん引しているということに関する書き込

みの丸がどうもないのです。この下は、基本的に札幌市視点なのですよね。

やはり、札幌市が北海道経済を牽引するということをある種意思表示として書いたほうがいいのではないかなと思います。というのは、冗談みたいな話ですけども、ここで札幌市にはこういう食に関するものがあるのだよと言っているのだけれども、札幌で取れているのはタマネギぐらいですよ。結局のところ、札幌の観光、食産業といっても、地域連携の中にあるやっぱりシンボルなのです。それは全ての産業に言えると思います。エネルギーも食もそうですし、観光も、札幌へというよりも、道央圏あるいは北海道という意味で来られるわけですから、その中における札幌という意思表示といいますか、そういう機能を果たすことを書き込んでいただきたいと思います。

○平本部会長 今の山本強委員のご指摘はとても重要だと思います。その意味では、丸のところに書き込むことはもとより、充実強化することという箇所に、まさに地域連携があって札幌の発展があるし、札幌が発展することで北海道の経済を牽引することができるという相互関係というか、そういうことを入れていくことが重要なのかなと思ってお話を伺いました。これもぜひご検討をお願いできればと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○木村委員 今の基本目標10の目指す姿1の中の充実強化することでは前段が食の販路拡大になっているのですけれども、もしかすると高付加価値化みたいなことを本当はおっしゃりたいのかなと思っていました。全道にあるいろいろなおいしい食べ物を素材のまま札幌を経由して東京に出してもあまり意味がないから、こんなに高付加価値をつけて食べられるのですよというお店やホテルを札幌につくるのです。そうすると、札幌が高い宿泊料の富裕層向けのサービスができる場所になって、そういう仕事ができる人が雇用されるみたいなことで経済に貢献ができるのかなと思いました。

先ほど検索したら、一番高い札幌のホテルが日航ホテルで、普通の部屋は3万4,000円で、東京だとアマンで10万円です。しかし、アマンみたいなレベルのホテルが札幌にはないわけです。そういうアマンの部屋があり、アマンに泊まる人が食べるレストランがあり、そこで働く人がいてとなるとと思います。

また、そこで働く人には、スタッフだけではなく、バックオフィスの人もいるわけで、デジタルスキルも持っていて、顧客情報を活用してもっといいサービスを企画したり、何かそこに派生するから、そのために高付加価値サービスを札幌で提供できるようになったり、そういうことをおっしゃりたいのかなと思いましたので、そうした文章になるともっといいのかなと思いました。

○平本部会長 これまでの10年とこれからの10年という話に本当に関連するご提言かと思えます。観光に関して、これまでの10年は、どちらかというと、インバウンドという量を追っかけてきた10年だったと思います。ところが、これからの10年は、量はもちろん重要かもしれないのだけれども、むしろ付加価値の部分を追求していくということをきちんと打ち出さないといけないのではないかというご提言かと思えます。これも重要

なご指摘だと思いますので、ぜひ文言のご検討をいただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○中田委員 今、木村委員がお話をされたことに関連するのですが、今の基本目標10の目指す姿1になるでしょうか、食産業の振興に絡めて、製造業の関係で、札幌は割と製造業が弱いと言われてはいますが、その中でも、食に関する製造分野はちょっと割合が高いと言われてはいますので、食品加工製造業がしっかりと発展をすることによって、素材がいいわけですから、それを国内外に発信する、提供することができると思います。そういった意味からも、食分野に関する加工製造業の促進ということを盛り込んだらどうかと思っております。ここにふさわしいかどうかは分かりませんが、食を提供するのではなくて、物を加工するというのを少し入れられたらと思います。

○平本部長 多分、この書きようは、どちらかというと、3次産業的に読めるかもしれませんが。他方、札幌はものづくりに弱いと言われているものの、産業の裾野は広いし、食品加工や食分野についてはそれなりの蓄積があるから、そこを押してはどうかというご提言かと思っております。これも全くおっしゃるとおりだと思います。どこにどう入れるのがいいのか、私も今すぐには分からないのですが、ぜひご検討をいただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○川島委員 私からも基本目標10のところについてです。

取組の四つ目と五つ目です。先ほどの中本課長のお話の中にもありましたけれども、札幌・北海道の魅力を生かしたコンテンツの充実というところでは、後ほど出てきますスポーツ・文化のところでも、スノーリゾートとしてのブランド化やスポーツツーリズムの活性化に向けた国内外へのプロモーションということが出てきていますよね。多分、ここにはそれらを包括して書かれているのかなと思いますが、今後は一体感を持った取組が効果的だろうなと思います。

あわせて、その辺りが分かるような工夫が何かあればいいのかなと思います。

例えば、ビジョン編の中の資料1の5ページの生活・暮らしの基本目標4のところですね。この健康的というところのキーワードに対し、幾つかのところでは分野ごとに分け、分野横断的なことが書いてあるのですが、このような工夫がもしあれば、いろいろな取組を総体的に行っているということが分かるのではないかなと思います。

○平本部長 一体感のある取組や分野横断的な取組が、ビジョン編や戦略編、特に戦略編の中で強調されてきたということ踏まえ、そういうことを表現してはどうかというご指摘かと思っております。これも全くおっしゃるとおりかと思っておりますので、ご検討していただくことばかりで申し訳ないですが、ぜひ事務局にご検討をいただきたいと思っております。

ほかにいかがでしょうか。

○柴田委員 このところで聞いていいのかは分かりませんが、札幌市は創造都市というのをもうやめてしまったのですか。僕は文化の人間ですが、産業振興財

団のインタークロス・クリエイティブ・センターというところに10年いて、創造都市関連の事業をいくつかお手伝いしたこともあり、経済分野なのかなと思っていたのですが、経済の案にも入ってないですね。この間、横浜に行ったら、創造都市の話をしごく熱く語られていたのですが、札幌市はもうやめてしまったのですか。

○平本部長 やめていないですよ。

○事務局（中本企画課長） やめていません。

○平本部長 どこに入れるのがいいのか、スポーツ・文化分野のほうなのかもしれません。でも、今、柴田委員がご指摘のように、ICCは、クリエイティブ産業やコンテンツ産業の後押しを行政がやるという全国区で見ても非常に珍しい存在だと思われるので、そのことが基本目標10の観光コンテンツの充実とも関わる可能性があるかと思えますし、目指す姿2のコンテンツを活用した経済の活性化と密接にリンクしているはずですね。

○柴田委員 でも、インタークロス・クリエイティブ・センターが関わっているNoMapや映画祭がどこにも入ってこないのですよ。それで、もう終わったのかなと思ったのです。僕は、実は、去年、創造都市関係でユネスコの審査員をお手伝いしたのですが、あれは幻だったのかな、もう終わったのかなと思ったということです。

書いてあることは全て正しいことですが、毎年書いているようなことでもあると思うので、未来に関わるものにも少し触れていってもいいのではないかなという気がしました。

○平本部長 今、柴田委員がご指摘してくださったことは、実は、事前打合せで中本課長と田中さんに私が申し上げたこととも関わるのですが、丸のところだけを見ると、10年前も同じことを言っていないかという項目がたくさんあるのです。雇用のところもしかりなのです。

しかし、そうではなく、これまでの10年とこれからの10年のことを中本課長が冒頭におっしゃってくださいましたよね。ですから、これまでの10年ではこれをやりました、それを踏まえ、これからの10年はさらにここに力を入れますよ、ないしは、環境が変わって、先ほど来から出ているDXやSDGsなど、そういったことはこれまでの10年ではあまり強調されてこなかったですが、これからの10年は、多分、そこが肝の一つになりますよね。そのとき、今の柴田委員のご指摘のICCや創造都市も関わってくるのではないかと思うのです。

細かいところでは幾つかあって、例えば、基本目標11の目指す姿4の2番目の丸では、新たな産業やビジネスの創出に向けてと書かれているのですが、ここではオープンイノベーションを促進することが重要だよということを言っているわけです。ただ、オープンイノベーションというのも最近の文脈で出てきた言葉なので、例えば、ここはオープンイノベーションを促進することでというのを最初にぼんと出してはどうでしょうか。語順を変えるだけに聞こえるかもしれませんが、語順を変えることで何を強調するかということが決まってくる面があると思うのです。

経済施策ですので、もちろん、継続性もあるでしょうし、10年前からやってきたこと

でこれからの10年も重要だよということもたくさんあるのだと思うのですね。ですから、がらりと変えろとか、スクラップ・アンド・ビルドをしろとかという趣旨では決していないのですが、これからの10年で札幌市としてやるべき戦略ないしは施策はどういう点に軸足ないしは、強調点が置かれているのかがきちっと見えるようにすることが重要なのかなと思います。柴田委員がおっしゃってくださったこともそういうことに関連しますし、これまでやってきた創造都市がどこにもないということは、創造都市はスクラップされてしまったのかということ、そうでは決していないわけですね。ですから、政策の継続性と今後の10年間で重点を置く部分ができるだけ見える形で書かれることが戦略としては適切なのではないかなと思った次第です。

最後に申し上げようと思ったのですが、今、柴田委員がおっしゃったことはとても重要だと思ったので、先に私の意見を申し上げました。

ほかにいかがでしょうか。

○佐藤（大）委員 手を挙げるタイミングがなかなか見いだせず、申し訳ありません。

私から言いたいことは、全体的なことなのかもしれないですし、どこにというのを考えていて難しかったのですけれども、先ほど教育の話や付加価値をつくるのが大事だという話がありましたよね。今回、経済と考えたときに、経済を回すために、仕組みや企業や産業を何とかということももちろん大切だと思うのですけれども、根底にある人づくりをもう少し前面に押し出してもいいのかなというのはかなり強く思います。

前にここかどこかで私が申し上げたことで、若者の人口流出があるのだけれども、誰が出ていっているのかがとても大切なのです。流出しているうちの少なからずの人は、もしかしたら、どちらかという優秀だと言われるような人や意識が高い人が外に出ていく傾向にあるのかもしれないということです。大学にいとそういうことを肌で感じたりするのですね。今年の就職活動で内定をもらっている私のゼミ生もいますけれども、頑張り屋に限って東京の大きな企業に決まるなどというのは毎年のことなのです。

そういうことを考えると、地域に残るということもそうですけれども、地域で育て、地域で働いてもらえる魅力あるまちづくりがとても大切で、そのために欠かせないのが大学への関与だと思うのです。例えば、基本目標11の目指す姿3で大学と出ているのですけれども、その下の充実強化することの中では大学というワードはもうなくなってしまっているのです。言っていることには私も同感するのですけれども、これは大学抜きではできないような気がするのです。

札幌は、構造的に大学の競争が弱いので、開かれる機会がないまま来ているなどというのは当事者としてもかなり感じるところです。札幌には私立大学が幾つもありますが、魅力ある教育や特徴的な取組をしている大学がどれだけあるかということ、他地域に比べると、これは自戒を込めて申し上げますけれども、かなり脆弱だなと感じざるを得ないのです。

そういったところで、では、それを切り開く突破口が何かということ、地域とのつながりや地域に開かれていくということ、または、大学単体だけでは変わりにくいところがある

と思うので、例えば、札幌市というある意味核となるような外部の人たちが大学をつないで、開かれた大学の中で新しい取組をするのです。このとき、スタートアップの話もそうです。

もう一つ、優れた人材を育てるという観点から言うと、先ほどありました目標12の雇用の部分にも関連してくるのではないかなとかなり思っています。その意味では、大学というワードを使って、人づくり、言葉は難しいといいますが、優秀とは何だという定義は難しいのですけれども、いわゆる経団連が言う競争力人材みたいなことで、実践者として優れた人をどうやってつくっていくのかについて、大学に任せるのではなく、もっと関与していくような姿勢が少しあってもいいのではないかなと感じました。

○平本部会長 冒頭の山本一枝委員のご指摘とも関連するところでして、まさに分野横断的、あるいは、経済や産業を発展させるときの前提となる人づくり、あるいは、人をつくるための教育機関である大学について、経済分野の戦略としてどう捉えればいいのかというご指摘だと思うのです。

今はまだ戦略編をやっているのですが、具体的な5年単位のアクションプランに落としこんでいくと、もっと個別具体の施策になります。経済分野の施策を見ると、多分、大学がどうこうという話があまり出てこなくなってしまう可能性があると思うのです。

基本目標11の目指す姿3のところのスタートアップ・エコシステムの説明のところには大学の役割も少し書いてあるのだけれども、もう少しそういった人づくりに関することが他の分野と連携しながらステップ的につながっているようなイメージで書けるといいというニュアンスで捉えてよろしいでしょうか。

○佐藤（大）委員 はい。

○平本部会長 注文ばかりですが、これもご検討をいただければと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

○山本（強）委員 追加です。

基本目標11の目指す姿2についてです。様々な分野でデータ云々とありますが、基本的にはほとんど何も書かれておらず、戦略と言いながら抽象的だなと感じました。私がこのところを見たとき、今、この世界で起こっていることとしては、国で言うと、まず、デジタル田園都市国家構想がありますよね。それから、もっとマクロに言えば、Society 5.0やDXがありますが、それに対して札幌市はどういう取組をするのかという意思表示が見えないのです。

私は関係しているので、多少知っているのですが、スーパーシティやスマートシティなど、いろいろなものがあって、データや先端技術を活用し、産業がよくなるためにはデジタルインフラの整備が必要だというのが今の国の構想なのです。僕はそれに同調したほうがいいと思うので、別におもねるわけではないのだけれども、そういう方針があるとき、我々は、それを支援するというか、それを活用するという意思表示をされてはどうかと思います。

キーワードでいうと、僕は作文がうまくないのですけれども、例えば、デジタルインフラ、データセンター、それから、高速ネットワークという言葉などです。

○平本部長 先ほど柴田委員からお話があったことや私が申し上げたこととも関連するのですけれども、これからの10年間の大事なキーワードをただワードとしてちりばめるのではなく、それが施策とうまく関わり合う形で入れ込めると、今度、具体的な政策レベルに落とすときにイメージが持ちやすいのではないかとということです。これも難題であることは承知しているのですが、ぜひご検討をいただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○中田委員 幾つかあるのですけれども、基本目標11の目指す姿1になるのかなと思います。その中の事業承継への支援に関することです。

実は、北海道、札幌の企業の六、七割で後継者がいないという現実があります。これは、特に小規模企業でそういった傾向です。一方で、スタートアップとありますが、起業したい若い人は潜在的に結構いるような話も聞いております。その中で、後継者がいない企業と独立したいと思っている若い方のマッチング、いわゆるM&Aに近いようなものなのですけれども、そういったことをもっと充実させることによって、せっかく培った企業のノウハウや技術が継承され、それで札幌市の経済のきちんとした基盤になり、営みができるということにつながりますので、事業承継について、M&Aという言い方がいいのかは分からないですけれども、そういったニュアンス的なことを切り離して、支援をするということを入れてはどうだろうか、と思います。

もう一点、次の基本目標12になるのですが、多様な人材の雇用の中で、今、札幌市において、技能実習生を含め、外国人材が非常に増えてきております。食品の分野であれば、バックヤードで惣菜をカットするものなど、何千人という外国人材の方が札幌の近郊を含めて在住しているのです。外国の方と一緒に雇用する、技能実習生を雇い入れることが企業としても大事で、必要になってきている時代で、ある意味、外国人材が企業を営む上でのパートナー的な存在になってきていると思いますので、そういった方への支援を含めた外国人材の支援を切り離し、対応の中に入れてはどうだろうかと考えております。

○平本部長 1点目は、事業承継に関わる話で、多分、いわゆる持続可能な経営という観点で、場所としては基本目標11の目指す姿4になるのでしょうか。事業承継と言ってしまうと少し限定されてしまうかもしれませんが、札幌市が発展していくために、せっかくいい事業を持っているにもかかわらず、後継者がいないがゆえに、店じまいをするとか、事業を畳まなければいけないケースがあって、辞めていく事業者とやる気のある人たちとをマッチングさせる必要性ですね。そういったことをビジネスにしている企業も既にありますけれども、札幌市の持続的なまちづくり、産業づくりに関わる話だと思うので、どこかにうまく入れられるよう、ご検討をいただければと思います。

それから、外国人材の問題も雇用のところに関わる重要なことだと思います。道外、国外から札幌経済を担う人材を呼び込むという文言はあるわけですがけれども、今後10年で

外国人材を札幌市としてどう捉えるのか、その方向性が少し弱いのではないかというご指摘かと思えます。たくさんの労働力の一部として捉えるのか、あるいは、もう少し積極的に考えていくということも含めて、従前とは違うアプローチを取ることもあるのかということをご検討していただいた上で文言を調整していただければと思います。

佐藤大輔委員、木村委員の順でお願いします。

○佐藤（大）委員 今、事業承継の話がありましたが、その課題はすごく大きいと思うのですね。この話ばかりで恐縮ですけれども、それを担ってくれる若い人たちとビジネスのマッチングが大事だというのは私も全くそのとおりで思っています。しかし、現状はどうなっているかというと、地域のビジネスについて若い人が知る機会そのものが全くない状況なのです。もちろん、高校生もそうですけれども、大きなウエートを占める大学生など、将来、地域を担ってくれる人たちとつながる場として地域が機能しているかどうかというのはとても大切だと思います。

そういった意味で大学がもっと開かれるということなのですが、そして、どこに開かれるのかというと、地域や地域の企業、産業で、そこにつながることによって、今、インターンシップというものがありますけれども、今はほとんどが就活の主戦場になってしまっていて、実質的なインターンシップ制度というものはあまりないのです。そういった意味で、実践力を養うという教育的な観点もさることながら、ある意味、地域のビジネスをリアルにして、そこにつなげるという側面でも、大学の中に企業が行くし、企業の中に大学も行くしというような行き来がある状況を担保しないとここの理解が深まっていけないのかなと中に入るとすごく強く感じるのです。

先ほども申し上げましたが、それは、本来、大学がやるべきなのですから、大学は、組織文化上、自分からオープンになるというのは相当難しいかなと感じるところがあります。であるならば、外の力と言うとあれですけれども、そういった機会をつくって、一つの窓口をつくっていく、そこで教育的なメリットもあるからマッチングになるような機会ともなるという仕組みをどこかに組み込むことができればいいなと思いますし、そういった意味でも大学というキーワードが入ってもいいのかなと思いました。

○平本部長 今の佐藤大輔委員のお話はとても重要です。実は、私ごとというか、北大のことですけれども、この4月から社会体験ワークショップという授業を1・2年生向けに開講しました。これは、大和総研と組みまして、北洋銀行にコーディネーターになっていただいて、1学期の15コマのうち、10社の北海道企業で、一部、北海道にも入っているのですけれども、どういう取組をしているのか、それから、そこで働いている人たちがどんな仕事をしていて、そもそもどうやって就職したのかをリアルに語ってもらって、その後、学生とディスカッションをするという授業なのです。こういった授業は、パッケージとしては意外とトランスファーバリエーションが高いもので、他の大学でもできそうです。もっと言うと、これを北大だけで閉じているのはもったいないのです。地域の大学で取り組んで、地域で人材を育てようというのが今回のコンセプトなのです。

そういう意味で、産業、経済に関わる部分と人材育成の部分が切り離せないというのは全くそのとおりだと思います。先ほどの分野横断の話と関わりますが、どこかでご検討をいただければと思います。

それでは、木村委員、お願いいたします。

○木村委員 人材育成と雇用の確保のところを読んでいて気がついたのですけれども、基本目標11の中で起業家の話が出てきますよね。そして、基本目標12の中で雇用の話が出てきていて、目指す姿1の中に「企業も必要とする人材を確保できています。」とありますが、ここは、働く人の分類をもう少しクリアにしてから書いたほうがいいのかと思いました。

一つは、横軸が「雇われる・雇われない」だとして、縦は高度か低度かといいますか、ブルーカラーかホワイトカラーかみたいな。そうしたら4象限に分かれるではないですか。人に雇われないで自分で仕事をして、高度な仕事といたら、多分、起業家だろうし、フリーランスでどこかの企業の決まり切った外注の仕事を受けている人もある意味で企業家だけれども、そんなに増えなくてもいい起業家ではないですか。もっと人をたくさん雇ってくれる企業家を増やしたいのだったら、そこにターゲットを当てて、基本目標11の中段の起業家の育成とはそういうことですよと。もちろん、工芸品を自分でつくって売りたいなフリーランスも増えてほしいのですけれども、そうではなく、ジョブズまでとは言わないけれども、自分で会社をつくって、将来、たくさん人を雇ってくれるような人を増やしたいという文脈にしたほうがいいのかと思います。

反対に、基本目標12では、高度な人材という話が出てきますよね。今まで札幌はコールセンターなども誘致してきましたが、今度はそうではなく、ホワイトカラーを増やしたいのですという話に振り切ったほうがいいのかと思います。雇われる人も、ホワイトカラーとブルーカラーと言っていいのかは分かりませんが、ざっくりと分けたら2種類があって、今度はもっと付加価値が高い仕事をするホワイトカラーの人をまちとして育てるし、移住してきてほしいのもそういう人ですと。コールセンターや決まった仕事をルーチンでする人を幾ら増やしたとしても、そういう仕事は先々なくなってしまいうし、その仕事から派生して新しいビジネスが生まれることはあまりないので、今度増やしたいのはそっちの人ですというターゲットが明確になったほうが基本目標12の施策がよりよくなるかなと思いました。

○平本部長 雇われるか、自営か、それから、より高度な職業か、よりルーチンな職業かという分類で、同じ働く人であっても、それぞれに働きかけるべきやり方は違うだろうというご指摘ですよね。それもそのとおりだと思います。

それから、仮に4象限で分けられるとしたときに、一体どの人たちをターゲットにするのかですね。行政としては第2象限であるということはなかなか言えないと思うのですが、全ての働く人たちがそれぞれの働き方に応じてよりよく働けるようなサポートをするというのが行政の立場だと思います。

その一方で、経済、産業という観点からすると、今、木村委員がおっしゃってくださったように、ジョブズあるいは、ビル・ゲイツとは言わないけれども、そういう札幌の産業をまさに牽引するような人材の育成も視野に入れて、重点的に押し出してはどうかというご指摘かと思えます。

私は、どちらかというとも木村委員のお考えに賛成で、広く浅くサポートすることももちろん行政だから重要なだけけれども、その中でも伸びそうなところを重点的にサポートして、ぐぐっと伸ばしてやると。シーツを引っ張ると周りもついて伸びてくるように、一つが突出すると、オーバーエクステンションといって周りがついてくるという理論もあるので、そういう施策を目玉として幾つか入れていくということが、これからの10年にはありかなと思ってお話を伺いました。

これも書きようは難しいと思いますが、産業、経済を活性化させるという点では重要なご指摘だと思いますので、ぜひご検討ください。

ほかにいかがでしょうか。

○柴田委員 今のお話を聞いていて思いついたのですけれども、基本目標11の目指す姿4に、海外の企業、海外展開、国際ビジネス人材の育成みたいなことが書いてあるのですけれども、企業が国際的になるための一番簡単な方法としては、外国人を雇いやすくするというのがあると思うのですね。

実は、うちのNPOはすごく小さいのですけれども、面白いことはやっているのですよ。今年是中国籍の方から相談があったのですが、コロナの影響もあり、見通しが立たず、お断りしたのですが、過去にはフランス国籍の方を雇ったこともあります。ですから、ハードルがなかなか高く、雇いたいだけでも、雇えない、そういうものを支援するような制度があると、札幌はすごく人気が出るのではないかなと思えました。

○平本部長 先ほど中田委員からも外国人材を少し分けて考えてはどうかというご指摘がありました。先ほどの繰り返しになりますが、札幌市として外国人の労働力、人材をどのように捉えるのかとの関わり合いがあると思いますけれども、人口が減少していく中で優秀な外国の方に産業の一部を担っていただくということは重要な視点かと思えますので、これもご検討ください。

ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本部長 それでは、ちょうど7時になりましたので、前半の経済分野につきましては一旦ここで閉めまして、ここからは後半のスポーツ・文化分野の議論をお願いしたいと思います。

それでは、事務局より資料の説明をお願いいたします。

○事務局(中本企画課長) 資料3のスポーツ・文化分野でございます。

こちら、資料に入る前に、これまでの10年とこれからの10年について、大きくくり

ですが、少しまとめてみたいと思います。

過去10年を振り返りますと、スポーツ、文化の裾野を広げることに注力してきたとまとめられると思います。

市民交流プラザの整備であったり、創造都市ネットワークへの加盟、国際芸術祭の実施、アジア大会、ラグビーワールドカップなどの大規模スポーツ大会の開催を通じて、データとしては、文化芸術やスポーツ観戦を行う市民の割合が増加傾向にあったり、子どもの運動時間数も増加傾向にあるという一定の成果が得られています。

一方で、まだまだ伸び代があるといえますか、文化芸術に親しむ市民の割合は結果的に3割にとどまっていたり、ウインタースポーツの実施率も減少傾向であったり、もっと札幌市民は肉体的にも精神的にも豊かになれる余地があることを示しているものと思います。

これを受けて、次の10年ですが、現時点の考えとしましては、2030年のオリパラを起爆剤として、文化、スポーツを札幌市の中にしっかりと定着させるというフェーズに転換していく必要があるだろうという認識です。

その発想を基に資料3を整理しておりまして、その資料の中身に入らせていただきます。

まず、札幌市の特徴である雪に着目した基本目標13の「世界屈指のウインタースポーツシティ」の目指す姿1として、「身近なところでウインタースポーツを楽しむことができる環境が充実しています。また、札幌市で育ったウインタースポーツのアスリートが国内外で活躍しています。」に向けた施策についてです。

丸の一つ目では、減少傾向にあるウインタースポーツ実施率を向上させる観点を踏まえて、ウインタースポーツに参加しやすい環境づくりに向け、ウインタースポーツ体験の場の整備やきっかけづくりを充実させること、丸の二つ目では、将来のアスリートの発掘や競技力の向上に向けて、アスリートから指導を受けることができる機会を設ける取組のほか、ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点などの機能の強化を進めることを掲げてございます。

次に、目指す姿2の「豊富な降雪量と都市機能を合わせ持つ世界でも希少な環境を生かして、大規模なウインタースポーツ大会を誘致・開催し、世界から注目されています。」に向けた施策についてです。

丸の一つ目では、ウインタースポーツの振興や国際親善、経済活性化のみならず、様々な分野におけるまちづくりの加速化に向け、2030年冬季オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を目指すこと、丸の二つ目では、オリンピック、パラリンピック以外のウインタースポーツ大会に関しまして、札幌市ならではの冬のにぎわいの創出と大規模なウインタースポーツ大会の開催経験の蓄積、大会を契機としたシティープロモートの促進などに向け、大規模大会の誘致を行うとともに、ウインタースポーツ施設の機能を向上させることを掲げてございます。

その他は記載のとおりです。

次に、基本目標14の「四季を通じて誰もがスポーツを楽しむことができるまち」の目

目指す姿1として、「誰もがスポーツを楽しみながら、心身共に健康で充実した生活を送っています。また、スポーツで得られた知見が市民の健康づくりなどに生かされています。」に向けた施策についてです。

スポーツの振興に当たっては、価値観やライフスタイルが多様化し、人生100年時代が到来する中、冬に限らず、四季を通してスポーツをする、見る、支えることができる環境を整備する必要があると考えております。

そこで、丸の一つ目ですが、スポーツを気軽に楽しむことができる環境づくりに向け、スポーツ活動の場の提供やアマチュアスポーツ大会の開催への支援などを行うほか、プロスポーツの観戦機会の充実等に取り組むことを掲げています。

また、丸の二つ目では、スポーツに参加しやすい環境の充実に向け、市有施設の整備や民間施設の整備への支援などを行うことを掲げたところです。

それから、丸の四つ目では、障がいの有無にかかわらず、誰もがスポーツを楽しめる観点から、障がい者スポーツの体験会や指導者養成講習会などを実施するほか、障がい者スポーツの場の整備などを行うこと、また、丸の五つ目では、スポーツで得られた医科学的知見を市民に還元する仕組みづくりに向け、関係機関との連携体制を構築するほか、ICTの活用などにより、スポーツ医学や栄養学、予防医療等の知見を生かした取組を行うことを掲げました。

資料の右上をご覧ください。

目指す姿2の「スポーツをきっかけに国内外から人が訪れ、地域経済が活性化しています。」に向けた施策についてです。

今後、スポーツの力による共生社会の実現、経済、地域の活性化を目指し、より活力ある札幌に向けて取り組んでいく必要があるという考えでございます。

そこで、丸の一つ目ですが、スポーツの参加者と国内外からの交流人口の拡大によるまちの活性化に向け、プロスポーツチームと連携したスポーツを通じたまちづくりへの取組のほか、札幌ドーム周辺における様々なスポーツに触れる機会の提供や集客交流機能の強化等を行うことを掲げています。

また、丸の二つ目では、スノーリゾートとしてのブランド化に向け、札幌市内及び北海道内のスキー場をはじめとした関連事業者の連携を支援するとともに、冬季観光コンテンツの充実などに取り組むこと、一つ飛ばして、丸の四つ目では、身近なところでスポーツをする、見る、支えることのできる環境の実現に向け、スポーツ大会や障がい者スポーツ大会を誘致、開催することを掲げたところです。

加えて、丸の五つ目では、アーバンスポーツやバーチャルスポーツなどの競技の認知度向上や競技者の裾野の拡大に向け、大会等の誘致・開催支援に取り組むことを掲げております。

次に、基本目標15の「文化芸術が心の豊かさや創造性を育み、世界とつながるまち」の目指す姿1として、「誰もが文化芸術に親しみ、創作や表現ができる環境が整い、多様

な価値観が受け入れられています。」に向けた施策についてです。

丸の一つ目では、文化芸術を自ら行う市民の割合が3割程度という課題を踏まえ、誰もが文化芸術に親しむことができる環境の充実に向け、子どもや障がいのある方などに文化芸術の鑑賞や体験の機会を提供するとともに、文化芸術イベントの開催や文化芸術施設の改修、更新などを行うことを掲げています。

また、丸の二つ目では、アーティストや文化芸術活動を支える人材が活躍できる環境に向け、アーティストや文化芸術団体へのサポート体制の構築などを行うことを掲げました。

次に、目指す姿2の「札幌市ならではの文化が生まれ、世界に発信され、多くの人が集まるとともに、様々な分野との連携によって新たな価値が創出され、まちの魅力が向上しています。」に向けた施策についてです。

今後は、パシフィック・ミュージック・フェスティバルや国際芸術祭などの国際的な文化芸術イベントの開催、札幌芸術の森などの文化芸術施設の活用、文化芸術と様々な分野との連携などによって、まちの魅力をさらに向上させ、にぎわいを生み出すことが必要との考えでございます。

そこで、丸の一つ目ですが、札幌市ならではの文化芸術の世界への発信や文化芸術人材の育成のほか、文化観光を通じた交流人口の増加に向け、国際芸術祭などをはじめとした文化芸術イベントを開催するほか、芸術の森の魅力向上などを行うことを掲げています。

また、丸の二つ目では、文化芸術による交流の創出や様々な分野との連携の機会づくりに向け、様々な関係者が共に文化芸術活動を行うことができる環境の整備を進めるほか、他の分野との連携につながる取組を支援することを掲げたところです。

最後に、目指す姿3の「文化・文化財を適切に保存し様々な形で生かすとともに、札幌市への愛着を深めることで、札幌市の自然・歴史・文化が未来へ継承されています。」に向けた施策についてです。

文化財や歴史、文化の価値と魅力を市民が共有し、大切に使いながら将来に継承していくことで市民にも来訪者にも魅力あるまちづくりを進めていくという観点から、文化、文化財の未来への継承に向け、保存、改修を進めるとともに、活用に向けて、市民や観光客への周知のほか、継承の担い手の育成などを進めることを掲げております。

スポーツ・文化分野のご説明は以上です。

○平本部会長 それでは、ただいまご説明いただきました後段のスポーツ・文化分野についてご意見をお願いします。

○柴田委員 2ページにわたる目標なのですが、この2ページの中で4分の3がスポーツだというのはどういう意味なのでしょう。

○平本部会長 これはどういう意味なのでしょう。私は、ビジョン編のときに項目数ではないのではないかと申し上げましたよね。ただ、柴田委員のこの審議会におけるお立場からすると、確かに4分の3がスポーツとはどうなのだという事にご回答になりますか。

○事務局（中本企画課長） これはビジョン編のときと同じ議論になろうかと思うのですが、まさに今、平本部長からおっしゃっていただいた項目数ではないという認識で我々も整理しているものでして、決して文化に比してスポーツの優先度を高く扱っているものではないという認識です。

○柴田委員 僕は、これを見てからすごく腹立たしく思っているのですね。前回の会議の数ではないということで、目標も2対1だったのですけれども、それを放っておいて拡大するようになっていくのですよ。2対1から今度は3対1になっていますが、これが何を意味しているかです。

僕は、芸術・スポーツ文化学科の芸術・スポーツビジネス専攻で、芸術の学生とスポーツの学生に教えているのですね。その中ではこういうバランスはないのですよ。これは書いてある方が明らかにスポーツのことが好きということがすごくはっきりしています。

例えば、基本目標14に誰もがスポーツを楽しみながらとありますが、これはスポーツの言葉を芸術文化に置き換えても全部通じるのですよ。それから、目指す姿2も、芸術文化をきっかけに国内外から人が訪れ、地域経済が活性化していますとか、全部通じるのです。

我々が学生たちにどういうバランスでやっているかという、地域活性化、まちづくり、社会包摂というのは、芸術とスポーツの両方に通じるのです。置き換えても同じだし、共同でもやれるのですよ。札幌ドームもそうですが、芸術とスポーツの両方を使う施設もあるのですよ。これを分けて考えると、好きなほうを優先して書いてしまうということがすごく見えるわけです。

では、芸術文化のほうに何が足りないかという、先ほど創造都市やインタークロス・クリエイティブ・センターの話をしたのもそうで、芸術祭とか、パシフィック・ミュージック・フェスティバルとか、毎年書かれているようなことが書いてあるのですね。現状維持は書かれていても、ここから先の未来に関するものは一切書かれていないのですね。これはちょっと問題だなと思っています。

例えば、先ほどのデジタルトランスフォーメーションやメタバース、NFTなど、オンライン経済がこれからすごくできてくるときに、NFTなんかはアートが結構先導していて、そこにスポーツが入ってきているのです。昨日、実は、NFTの講義を大学の中でやったのですけれども、そういうことも含めると、そういう技術革新などにも力を入れ、芸術文化に膨らますと、経済や観光などとも絡んでくるではないですか。ですから、固定のイメージで見ないで、少し広げて横断的に進行するようにすると、古くさく見えなくなるかなという気がします。

○平本部長 柴田委員のご指摘は、ビジョン編のときから一貫していらっしゃって、スポーツと文化芸術を分けてしまっているのが変でしょうということとも関わるもので、ボリュームの問題だけではないですね。

○柴田委員 これは、必ず質問が出ます。どうしてこういうバランスになっているのです

かと。特に、文化の人が見たら明らかに差別化されていると見えますよ。政令指定都市の政策として出すにはあまりにもバランスが取れていない感じに見えます。

○平本部長 これは要改善ですね。項目数の問題ではないと私はビジョン編のときに整理しましたがけれども、今、柴田委員からご指摘をいただいたように、結局、この下にアクションプランがぶら下がって、アクションプランと予算が密接に関わるということを考えたときにそれではよくないということがあります。

もう一つ、もっと重要な視点として、札幌市は、スポーツと文化芸術は別々なものであるという立場で施策を展開しようとしているのか、それとも、スポーツと文化芸術を一体のものとして市民の暮らしを豊かにし、市民の感性を育てていくことを考えているのか、体力も含めてなのかもしれませんけれども、その立場の問題とも関わると思うのですね。

決して札幌市の肩を持つわけではないのですけれども、基本目標13にウインタースポーツシティというのがぼんと出ているのは、今、市の施策として2030年のオリパラ誘致を頑張るやろうということになっているからだろうと思います。一方、オリパラについては反対意見も現実的には存在していて、これが本当にどうなるかは今のところはまだ分からないということもありますよね。

例えば、基本目標14の目指す姿の1と2のところですが、スポーツを芸術に置き換えても全く同じことが言えるというのは、確かによく見るとそうですね。これについては今後の具体的な施策がちゃんと展開できる形に見直しが必要かなと私は今の柴田委員の発言を聞いて思いました。

原田委員、もし追加あるいは関連することで何かご発言があれば、スポーツのお立場から何かございますか。なければ、特段、ご発言は要りませんが、いかがでしょうか。

○原田委員 今、札幌市は、国際競争力の高いスノーリゾート形成促進事業という令和4年度の補助事業にトライしているのですが、その中で非常に重要な位置を占めるのがベースタウンというものです。

北海道の方はあまり気づいていないのですけれども、札幌は札幌国際、藻岩山、ばんけい、テイネという四つのスキー場に1時間以内で行けるのです。200万人近い人が住んで、2万6,000室のホテルがあるという、世界でここしかないというか、ほかではあり得ないような状況です。何が言いたいかというと、スノーリゾートというのは文化芸術なしでは成り立たないということです。

例えば、スイスにツェルマットというところがありますけれども、そこにはミシュランのレストランが13軒あって、何とスキー場に画廊があるのです。そこに来た富裕層のペンションなんか絵を買って帰っていくのです。このように文化芸術なしでは成立し得ないので、そこはうまくここに書き込んでいってもいいのかなという感じがします。

四季を通じて誰もがスポーツを楽しむと言うのですが、これは、スポーツだけでなく、その結果、何が起きるかということ、ウェルビーイングといって、幸せな生活を送れるということなので、もう少し包括的にし、スポーツ、文化芸術を楽しむことができるまちな変

えても何らおかしくないのかなと私は思います。

○平本部会長 今の柴田委員のご発言と同じ趣旨かと思しますので、これは大幅な変更のご検討をいただければと思います。よろしくお願ひします。

山本一枝委員が挙手をされておりますので、お願ひいたします。

○山本（一）委員 私からも文化の書きようについてです。

一番下の担い手と書いてあるところですがけれども、そう言いながら、「文化財の未来への継承に向けて、文化・文化財の保存・改修を進めるとともに、これらの活用に向けて市民や観光客への周知を行う」とあるだけです。しかし、これは物の話であって、人の話ではないのです。それなのに、いきなり継承という文脈になっているのはすごく違和感があります。物だけではなく、やはり、人への支援です。札幌で活躍している高い文化を生み出してくれる人たちに対しての支援があると、もう少しきちっとした支援になるのかなと思います。

私は、以前、金沢に行ったことがあるのですが、金沢に行くといろいろなところで人間国宝の方に会えるのです。美術館に行っても人間国宝の方がスピーチをしていますし、私たちが集まった会議の中でも人間国宝の方たちがお話をしてくださるのです。このように一つの都市の中にたくさんの人間国宝がいるというのは物すごい文化水準だなと感動して帰ってきたことがあります。

札幌はどうかといいますと、画家や彫刻家、家具作家、ガラス作家、小説家、焼き物をつくる方、映像作家、建築家、ファッションデザイナーなど、文化を生み出す人たちが結構たくさんいらっしゃると思うのです。この方たちが文化を生み出して、それを私たちに提供してくださるわけですから、まず、生み出したものではなく、これから生み出していくであろう人に着目していただいて、文化を生み出す人たちと連携して文化を発信していく役割を施策として盛り込んでいただけたらいいのかなと思いますし、それがあってこそ継承の担い手の育成という文脈につながるのかなと思います。

○平本部会長 冒頭の柴田委員の未来の記述が一切ないではないかということとも関連することです。将来的に札幌の文化芸術を豊かにしていく潜在的な人材、ないしは、顕在化していても、これから伸びていく人材に対する支援ということがどこかに入らなくてはいけないのではないかというご指摘ですね。それもごもっともだと思います。

右下の最後の丸の部分は確かにあまり未来志向には見えないと思いますので、これについてもご検討をいただきたいと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

○中田委員 基本目標13の「世界屈指のウインタースポーツシティ」の目指す姿1に関することです。

目指す姿に札幌市で育ったウインタースポーツのアスリートが国内外で活躍しているという文章が入っておりますけれども、恐らく、これは2030年の冬季オリンピック・パラリンピックの競技大会を意識し、オリンピックに参加できるようなアスリートが札幌市

で育ってくれば、市民の中でウィンタースポーツの裾野が広がっていくのではないだろうかということもあるのかなと思うのですけれども、ぜひ、丸の二つ目のアスリートの発掘は、もう少し突っ込んで、発掘とアスリートに対する支援ということを書き加えたらどうかと思います。

というのは、実際、札幌市出身の方でも、現に全日本クラスでオリンピックを目指している人が何人かいるのを承知しております。しかし大学で、体育会系としてやっているときはいいのですけれども、その後、就職して社会人になったときに、企業に勤めながらオリンピックを目指している方への仕事の面への支援、あるいは、金銭的な支援といえますか、それをしっかりやって支えていかないと、せっかくオリンピックに出られるかもしれない、あるいは、全日本クラスの選手がいるにもかかわらず、なかなか成長できないということになってしまうのです。

そういったことから、道外のある自治体では、企業と行政が一体となって選手を支援している仕組みづくりをしているところもありますので、そういったことを参考にしながら、将来のアスリートの発掘と支援を何かの形で書き加えていただければと思います。

○平本部長 これは、充実強化することのところにいいのか、それとも、具体的な最終的な施策レベルでうたうのがいいのかは分からないのですけれども、発掘だけにとどまっては駄目で、支援も重要ですよというご指摘ですね。もっと言うなら、アスリートのセカンドキャリアの問題も重要になるわけです。メダルを取って有名にはなったけれども、その後、長い人生、必ずしも豊かに暮らせないというのもよくないと思いますので、そういったことも含めた支援の必要性についてお考えいただきたいということでした。

原田委員が挙手をされておりますので、ご発言をいただけますでしょうか。

○原田委員 資料3の基本目標14の目指す姿2の下の赤いところに充実強化することとあって、プロスポーツチームと連携したまちづくりとありますが、まちづくりには、プロスポーツだけでなく、様々な手法があると思うのですね。今、第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略の地方創生交付金の中で、スポーツ・健康まちづくりというチャプターができていますので、将来的に地方創生交付金の獲得を目指して、そういう書きぶりに直したほうがいいのかなと思います。ですから、単なるまちづくりではなく、スポーツ・健康まちづくりに変えていただきたいということです。

もう一つ、スノーリゾートとしてのブランド化がここにあります。これは基本目標13に持っていてもいいのかなと思います。特に、ブランド化というよりは、ワンブランド化ですね。四つのスキー場を統合したようなスノーリゾート形成のワンブランド化というような表現が適当かなと思いますので、それもご検討していただきたいと思います。

また、文化という点についてです。

今、日本全国にスポーツコミッションというものがあって、札幌にはグローバルスポーツコミッションというものがあるのですが、例えば、金沢や新潟では文化スポーツコミッションという名前を使っていて、文化的なイベントの誘致も入っているのです。将来的に

は組織の名称変更も踏まえ、ここをもう少し多様化していてもいいのかなと思います。
○平本部長 3点のご指摘で、まずは、地方創生に関わる国の施策と連動させた書きぶりが必要だということで、これは前半に山本強委員がおっしゃったこととも関わるご指摘でした。やはり、唯我独尊ではないけれども、札幌市だけ独立でやるというよりは、国の施策で使えるものについてはきちっと書き込むのがいいのではないかというご指摘でした。

2点目は、四つのスキー場のワンブランド化ですが、都市型ウインターリゾートというキーワードがワンブランド化を意味した表現かと思います。恐らく、意図としてはそういうことを言っているのではないかと思いました。

3点目のスポーツコミッションについてですが、幾つかの都市では文化・スポーツコミッションという形で文化とスポーツを切り離さない形の施策が既に展開されようとしているということです。これは冒頭の柴田委員のご発言の趣旨とも関連すると思いますので、これからの10年の施策を考える上ではぜひご検討をいただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○木村委員 今出てきた意見と近いのですけれども、私も資料の右半分の目指す姿2は左側の基本目標13の中に組み込まれてもいいのかなと思っていました。読んでいくと、また同じ内容が来たと思うような内容で、充実強化することのプロスポーツチームとこのところの後段のスノーリゾートとしてのブランド化は、多分、オリンピックが来て、それできちんとブランド化やプロモーションができると思いますし、プロスポーツのところだけが必要なのだったら、そこだけ独立して左に入れてもいいのかなと思います。また、スポーツ大会や障がい者スポーツ大会もオリンピックと並列で書いたらそれで済むような気がします。

それから、アーバンスポーツやバーチャルスポーツの普及がオリンピック競技ではないことを指しているのだったら、それはそれで書けばいいし、もしくは、健康増進や市民がいろいろなスポーツに親しんでという文脈なのだったら健康の分野に入れてもいいのかなと思いました。

また、文化芸術の分量が少ないというのは確かに前からそうだなと思っていたのですが、文化芸術がまちに何のために必要なかがあまり出てこないから分量が少ないとか、失礼ですけれども、中身が充実しないということなのかなと思っています。豊かな人間性や想像力、感性の土台だから、まちに文化芸術が必要なのです、みたいなことが今までの資料ではあまり触れられてきていないということです。しかし、その創造性や感性みたいなものが起業する人や経済の土台になったりしているので、人間としての土台なのですみたいなことがあってもいいのかなと思いました。

それから、これまでも、No Mapsもそうだし、それを文化芸術と言ったら駄目ですよという人がもしかしたらいるのかもしれないですけれども、No MapsやYOSAKOI、花まつり、ライラックまつりなども札幌が持ってきた文化芸術に関わるイベントだと思います。それでもっと盛り上げたいとか、またお金の話になって恐縮ですけれども、文

化芸術というのは、投資したら7倍のリターンがあるから、それをもう少し書いてもいいのかなと思いました。

ただ、すぐにリターンが来るわけではなく、物すごく長期の投資や蓄積が必要だから書きにくいのかもしれないけれども、札幌は歴史が短いから、今までの蓄積がない分、むしろこれから投資していかないと、本当に蓄積が少ないままで、この先も文化芸術にあまり力を入れないまま、おまけのように最後についているみたいな状態が続いてしまうので、人間性の土台として必要ですよということがあってもいいのかなと思います。

また、これも気になっているのですけれども、誰もが文化芸術に親しみと書いてあって、その後の充実強化することでは、誰もがというのが子どもや障がいのある方に書き換えられているのです。誰もがと言ったら本当に誰もがとしておいたほうがよくて、つまり、子どもや障がい者に配慮すればそれは誰もがそうであるみたいな違和感があるので、充実強化することの表現は改めたほうが良いと思います。

○平本部長 最後の点はおっしゃるとおりですね。これは置き換えたつもりで書かれているわけではないと思うのですけれども、子どもや障がい者だけを特別扱いしているわけではないし、本当にまさに「誰もが」であるべきだというご指摘ですね。

それから、基本目標13に入れたほうが良いのではないかということについては整理をご検討していただければと思います。

また、アーバンスポーツ、バーチャルスポーツの位置づけについてです。そもそも、アーバンスポーツやバーチャルスポーツが何だか私もよく分からなかったのですけれども、言葉がまだこなれていないせいで、イメージが湧きづらいということもありますし、ウェルネス、その先にくるウェルビーイングということだけでもなく、新しい分野、新しいスポーツの領域としてここに書かれていると思うのです。ただ、もしここに書くのが適切だということであるならば、分かるような表現で書いていただきたいと思います。

それから、今の木村委員のご発言で重要だなと思うのは、文化芸術の必要性についてです。ビジョン編でも大分書いてあると思うのですけれども、それを踏まえた上で、だからこれからの10年はこうするのだということが基本目標15だと読み取りづらいというご指摘ですよ。それは柴田委員の最初のご発言とも関わる話ですし、さらに言うと、文化芸術というのは、ここに書いてある書きぶりですと、何となく高尚な文化芸術ばかりを想起させるのですが、サブカルチャーもあるし、食文化もあるし、お祭りやYOSAKOI、雪まつりもある意味では立派な文化だし、そこで行われているパフォーマンスというのは芸術と言えるのかもしれませんよね。そういう視点からすると、今、札幌が持っている様々なものが文化芸術の中身になっているという視点がちょっと欠けているということは私も今日の委員の皆様方のご議論で感じております。

ほかにいかがでしょうか。

○柴田委員 芸術文化そのものというよりも、芸術文化の機能を活用してまちを活性化させる、そういうことだといいいのではないかなと思いました。

先ほどは創造都市の話をしましたよね。横浜で僕が最初の2005年頃に少し関わったことがあったのですが、そのときはそんなに文化が活発ではなかったのですよ。そのときに創造都市を打ち出して、そこから空きビルを活用し、安くするし、アトリエにしてもいいからという、300人近いアーティストやクリエイターを暮らせる計画をしたのです。集まることに興味があるから、また、何かが起こるかもしれないといってすごい移住が起こったというわけです。そこからまちなかの空きテナントの活用とか、黄金町や寿町そうした人が住みづらい地域にアーティストを派遣して行ってまちの問題を解決していくということが起こったのです。

そういう2次的効果が出てくるような感じにすると少し役に立つのかなという感じもします。

○平本部長 横浜の事例等も含めて、札幌ででき得る、十分にうまくまねし得るところを戦略として掲げてはどうかということかと思えます。

それから、文化芸術の機能を活用してまちを活性化させるというのはまさにそういうことだと思いますので、そういう書きぶりがどこかにあってもいいのかなと思いました。

ほかにいかがでしょうか。

○川島委員 幾つかあります。

まず、今お話になっていた文化に関してですが、都市空間の分野で、ウォークブルシティへ、歩きたくなる都市というのがありますよね。ですから、先ほど来お話が出ているように、まちの中で文化のイベントや文化施設が充実しているという観点から、そういうものを含めて書いていくのも重要ではないかなと思いました。

次に、スポーツについてです。

まず一つ目は、運動部活動の地域移行についてですけれども、先月、スポーツ庁の有識者会議から提言がありました。この内容は、今後、公立の中学校の部活動を段階的に地域に移行していくというものです。これはまだ提言レベルですので、スケジュール等は変わってくるかもしれませんが、令和5年度から3年間を集中移行期間として位置づけておりますので、間違いなくこの10年の間にこういうことが行われていくと思われれます。

そうなったことを仮定して基本目標14を見たとき、部活動とは書いていますが、トップアスリートやアスリートを派遣するなどということで、これらは現在も多少やっているような内容だと思いますので、ここでいいのか、教育の分野なのかは分かりませんが、学校の運動部活動の支援を入れておくのがいいのかという気がしました。

もう一点、細かいことなので、アクションプランになってくるのかもしれないのですが、事前にいただいた資料を拝見したところ、生活・暮らし分野の中に今回初めてウォーキングというワードが出てきたような気がします。これは新聞報道でもありましたが、別の分科会でウォーキングの話が出たことを受けてこうなったのかなと思ったのですが、ここでは、健康への理解促進や健康づくり、介護、生活習慣病の予防のために各区でウォーキングを取り入れていくようなことです。

札幌市の現在やっているスポーツの中で実施率が一番高いのがウォーキングですし、今後やりたいスポーツでもウォーキングが断トツで一番なのです。スポーツの中では今さら感があるのですが、やはり、基本的な運動としてウォーキングをと思いますし、生活・暮らし分野で特記するのであれば、当然、スポーツにも載せていただいたほうがいいのではないかなと思いました。

○平本部長 今のお話は、それぞれが他の分野とも関わるという内容のご指摘だったと思います。戦略編の白抜きの丸のところに、場合によっては、他の分野と密接に関わりながら施策を展開しなければいけないものを積極的に書いて、確かに戦略編の答申案としては重複になるのかもしれないのだけれども、ここは分野横断的にやるところだよという形で、あえて同じことを両方に書いておく、ないしは、三つにわたって書いておくというやり方もあるのかなと今の川島委員のお話を伺って思いました。

それがいいかどうかはすぐに判断できないのですけれども、それぞれ密接に関わっており、経済、文化芸術、それから、健康、福祉、ウォークブルシティということになるとまちづくりや空間とも関わってきますよね。

前回、分野横断的ということについてご議論をいただきまして、その重要性とともに難しさももちろんあるのですけれども、最終的には施策レベルで縦割りになってしまって連携が行われないということは、行政だから難しいのは分かるけれども、少しでいいから次の10年で解消できるような方向性があるといいかなと今の川島委員のご指摘から感じた次第です。

原田委員、山本強委員の順にお願いいたします。

○原田委員 今の平本部長の意見と非常によく似ているのですが、資料1-1の分野横断的に取り組む施策の中に健康行動の促進とウォークブルシティの推進という非常によい文言がありますので、そこから明らかにウォーキングが派生してきていますが、確かにどこかでウォーキングという言葉はフィーチャーしておいてもいいのかなと思いますし、スポーツ・健康まちづくりのベースになるものだと思います。

○平本部長 分野横断的ということ意識するべきだということと、ウォーキングというワードはもしかするとフィーチャーしてもいいのではないかというご指摘ですので、これも検討していただければと思います。

それでは、山本強委員、お願いします。

○山本（強）委員 基本目標13の「世界屈指のウインタースポーツシティ」は、「世界屈指の」というところにアクセントが置かれているのです。また、冒頭に原田委員から札幌はすごいのですよというご意見もいただきましたよね。確かに、札幌市民は200万人都市で大雪でということに関しては自信を持っているみたいです。ところが、世界屈指のウインタースポーツシティのイメージがあるのかが私の疑問なのです。つまり、そうなるための戦略で、今、恐らくその認識はないのだと思うのです。

スキーはニセコでしょう、スケートは帯広でしょう、カーリングは置戸でしょうとなっ

ていますよね。では、札幌に軸足を置いたとき、我々札幌市民が屈指の、と言うとき、何を根拠に言うのですか。ですから、この先10年をかけ、我々は世界に冠たるウインタースポーツシティになるのだということを明記してはいかがかと思います。

僕は、スポーツは全然分からないし、運動音痴なので、どうすればいいかが分かっているわけではないですよ。でも、プライドが持てるような書き込みをしてはどうか、と私は思いました。

○平本部会長 確かに、札幌に住んでいて、札幌市は世界屈指のウインタースポーツシティだと市民が思っていると言われると、やや疑問ですよ。

先ほどの経済の食の話ともちょっと似ていて、札幌は食産業がと言うのだけれども、実を言うと、ほとんど道内各地から取り寄せたものを飲食業として提供しているということと似ていますよね。それに、先ほどの経済を牽引するというお話と似ていて、札幌市の都市機能をスポーツの分野にうまく加えることによって、北海道全体のウインタースポーツを牽引するとか、そうした視点があってもいいのかなということを山本強委員の先ほどと今のお話を伺って感じた次第です。

先ほどの都市型ウインターリゾートの話は面白いと思いますし、原田委員が先ほどおっしゃったように、四つのスキー場が1時間以内のところにあって、しかも、ナイター営業までしているという環境は世界で見てもまれだというのは事実だと思うので、そういうハードウェア的な部分は十分に訴求できると思う一方、基本目標13です。基本目標は今からは修正できないと思うのですけれども、これの意味するところは何かということ、札幌の都市機能や豪雪をうまく活用しながら、札幌で世界屈指を目指せる分野もあるということだと思うのです。例えば、ハーフパイプはばんけいスキー場が有名で、有力選手が育ったりしていますし、モーグルもかつてテイネハイランドで選手が育ったりもしました。ただ、そこだけでは駄目だよねというご指摘はおっしゃるとおりだと思いますので、これは充実強化することの辺りか、その下の施策の方向性のところで少し書きぶりを検討していただくことで、今後10年間で目指すところを明らかにすることが重要かもしれません。

ほかにいかがでしょうか。

○佐藤（大）委員 今の山本委員のことに関連するのかなと思うのですけれども、今まで成立して有名というか、ビジネスとしても成立しているようなスキーとは別に、未知のものや、新しかったり、または、まだ下火だけれども、世界のどこかではやっていたりするもの、その二つがあると思うのです。既にあるものを持ってきて札幌でというのは今のお話の延長線上で無理があるというか、スキーを本格的にやるのだったら、やっぱりニセコに行ったほうがいいよねという話になるような気がするのです。では、札幌が強みを生かせるところという、まちであり、人口があり、小さいけれども、スキー場はたくさんあるし、いろいろなチャンスがあるところなのかなと思うと、新しいスポーツだったり、芸術もそうだったりと思うのですが、成長するというか、これから芽を見つけて大きくしていくようなチャンスがあふれるところではないかと委員の方のお話を聞いて思っ

いました。

それに、芸術もスポーツもずっと公金を入れ続けて生き長らえさせる取組ではないと思うのです。やはり、自立してもらい、例えば、野球であれば、ビジネスとして、興行としても成立していて、広告業者としても成立していますよね。そうすると、自分たちで再生産を始められるのですが、そういったものをこれからどんどん増やしていくという観点が大事なのかなと思いました。先ほど申し上げた表現で言うと、新しいものが成長するまちや新しいスポーツや芸術が発展していくまちという位置づけが実は札幌にとってはちょうどいいニュアンスなのかなと思いました。

○平本部会長 既存のものに一生懸命投資するのではなく、伸び代の大きいところにリソースを投入するのもいいのではないかとのご指摘でした。夢のあるお話ですし、いろいろあるスポーツ振興施策の中にそういったものが入ることは十分にあり得ると思います。

恐らく、これはアクションプランのところに出てくると思うのですけれども、ただ、そういった成長や新しい芽やチャンス、そして、最後には自走できるような姿を目指すという視点はとても重要だと思います。全てのスポーツで自走できるようになるとは残念ながら思えないのですけれども、自走できるような姿を目指すことも重要だと思いますので、今の佐藤大輔委員のご指摘はどこかに反映させていただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本部会長 今日、随分たくさんのご意見をいただきました。また、それぞれのご意見は戦略編の中身をブラッシュアップするのに十分に貢献できるようなすばらしいものだったと思います。

それでは、最後になりますが、まだ若干の時間がございますので、全体を通じて、あるいは、参考資料として机上に配付いただきました他分野の内容について、お気づきの点のほか、ご意見やご質問も含め、もしあればいただければと思います。

○柴田委員 最近、こういういろいろなお仕事をされていて、特に芸術文化は、すぐに答えが出ないので、どうやって評価するのだという話がよく出るのですけれども、逆算してレガシーから考えていくとどうですか、10年たった後に何が残っていたら成功だと言えるのか、そこを匂わすものとか、方向性みたいなものがやれたらいいなという気がします。僕もまだ全部を細かくは見ていないのですけれども、そういう変化が出るような仕掛けができたらいいなと思っています。

○平本部会長 勉強のために教えてほしいのですが、10年後のレガシーから逆算することについて、先ほど横浜の創造都市の話をしてくださいましたけれども、何か分かりやすい事例はございますか。

○柴田委員 これは僕の意見であって、誰かの説ではないので、説得力はあまりないかもしれないのですが、芸術文化の評価を聞かれるときに話すのは、動員数や売上げが短

期評価で、中期評価はそれが起こったことで別の団体や分野が刺激を受けて動くこと、例えば、芸術文化に関わることによって、生活が新しく変わる、まちづくりで何かが変わるということです。そして、3番目は、それこそ10年以上たったときに観光のまちとして有名になるということです。観光地にあるようなもので、作者が死んで何百年、何千年経っても残っているもので構成されている街がありますね。例えば、ローマとか。そして、もうひとつ、形のないもの、つまり、思想やアイデアという無形のものもあると思います。イベントとしてぱっと消えてしまうのではなく、何か残るものをつくれたらいいのではないかなという気がします。

○平本部長 短期、中期、長期で考えて、売上げや動員数という目に見える数字、それから、他分野への波及みたいな話、そして、それが文化として最終的に定着する視点ということですね。

○柴田委員 そうですね。未来の新しい地域資源をつくるような意識というのでしょうか。

○平本部長 今、柴田委員がおっしゃった視点も重要なのだろうなと思いました。戦略編にどうこうということではないかもしれませんが、そういう観点で文化芸術を捉えることが重要であるというご指摘かと思しますので、行政の皆様がこれから施策を展開するときに今のご指摘を頭の片隅にとどめていただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本部長 どうもありがとうございました。

それでは、本日の審議はこれにて終了いたします。

委員の皆様方、オンラインのお2人の委員も含め、本日は、活発なご議論をいただきまして、どうもありがとうございました。

それでは、事務局にお返しいたします。

3. 閉 会

○事務局（浅村政策企画部長） 今日は、長時間にわたりまして、ありがとうございました。

今日は、経済とスポーツ・文化の2分野にわたり、ご議論をいただきました。ご指摘をいただいたことについて、今後の整理をしていく上で気に留めておかなければいけない重要なことが幾つかありましたので、少しコメントをさせていただきたいと思います。

2分野を通じまして、横断的施策、もしくは、分野横断的な記述に関するご指摘を幾つもいただきました。前回、5月に、横断的施策ということで、5分野にわたってご議論をいただいたときにも同様の話があり、例えば、人づくりや大学連携といった話は人口減少対策のところ記述をしているところがございますけれども、その横断的分野と分野別施策との関係といいますか、同じ理念で施策に落とし込むということが幾つかあると思って

います。それについては、平本部長からもご指摘いただいたように、再掲といたしますか、分野ごとにここも関係あるという施策も掲載していくことで、全体像として奥行きがあるように見える工夫が必要なのかなと感じました。

それから、経済の分野におきましては、北海道の経済をけん引しているという部分が施策として見えないというご指摘を山本委員からいただきました。ビジョン編の第5章に北海道とともに発展する札幌市という記述をしておりますが、これは施策全般に我々の視点として置いておかなければいけないことだということもありまして、全ての分野においてこの思想は必要なのですが、特に食分野や観光分野では非常にシンボリックに取り組まなければいけないということでもあるので、特出しといたしますか、その部分がちゃんと分かるような記述が必要なのかなと思いました。

それから、観光分野につきましては、コロナ禍を経まして、今までやってきた取組がばたっと一旦止まった状況にあります。これは、観光業界しかり、飲食業も含めて、非常に打撃になっていて、その回復を支えていくことも短期的には必要なのですが、札幌が観光都市としてステップアップしていくための機会と捉え、質的転換をしていくということに我々も施策として取り組んでいかなければいけないなと考えておりますので、その思想が分かるような記述に整理していきたいと思っております。

それから、事業承継に関しましては、我々も非常に重要な視点だと考えておりまして、これまで以上に中小企業にとっても課題感は非常に大きいと捉えております。この点も含めて記載を工夫していきたいと思えます。

それから、文化・スポーツ分野におきましては、文化の記述が非常に少ないというご指摘をいただきました。我々としては、文化について、市民アンケートを取る中でも、市民の受け止めとしては非常に充実している分野であると捉えておりまして、それは我々がこれまでずっと文化に関して力を入れて施策展開をしてきたということもあろうかと思っております。ただ、そこで止まるのではなく、未来志向が見えないというご指摘で、10年後のまちづくりの中でどう生かしていくのかをイメージした上で逆算するというキーワードもありましたけれども、いわゆるバックキャストしていくという施策の組み立て方も必要だと思いました。

文化もスポーツも、かなり多分野にわたって影響を与えていく重要な施策分野だと我々も捉えています。我々も文化とスポーツを同じ部局の中で施策展開していた時期もありますので、そこは我々も別物だと考えているわけではございません。それぞれが様々な社会課題を解決する方法にもなりますし、いろいろな分野に影響を与えることで文化自体もしくはスポーツ自体が活性化していくという非常にいいスパイラルに入っていく触媒になる分野だと思っておりますので、その点も分かるような整理ができればと思います。

また、若干足りないというご指摘をいただいております。今日は事業部局の職員も委員の皆さんの議論をお聞きしておりますので、持ち帰りまして、事務局で議論を重ねていきたいと思えます。

さらに、事業のレベルで生かしていけるようなご意見も多くいただきました。来年、この戦略編を基に策定するアクションプランの中に生かしていくものも多々あるかと思えますので、その点のレベル感の整理等も含めてやっていきたいと思えます。

それでは、次回の会議の予定について企画課長からご説明いたします。

○事務局（中本企画課長） 次回の会議になりますが、審議会、いわゆる皆さんにお集まりいただく会を9月頃に開催したいと考えております。ノーザンクロスから日程調整についてのご連絡を改めてさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

○平本部長 それでは、長時間にわたるご審議をどうもありがとうございました。

次回、また9月の全体の審議会でお会いできることを楽しみにしております。

今日は、どうもありがとうございました。

以 上